

聖地の記憶——旅順を事例に——

高山 陽子

1. はじめに

NHKのテレビドラマ『坂の上の雲』（2009年～2011年放送）は、人々に日露戦争の記憶を呼び起こすと同時に、松山や旅順¹⁾などの撮影場所に観光ブームを巻き起こした。司馬遼太郎原作の本小説は、松山出身の秋山好古と真之兄弟、正岡子規らを主人公として日清・日露戦争を描いた歴史小説である。1996年の司馬遼太郎の死後、ドラマ化が決定し、3部構成で3年に渡って放送されることとなった。2000年から松山市では『坂の上の雲』を軸にした町づくりを進めてきたが、2003年1月にNHKが小説のドラマ化を発表すると、秋山兄弟の記念像の設置や坂の上の雲ミュージアムの設立などが本格的に検討されるようになった。ミュージアムは、2007年4月28日、松山城の南の麓に開館した。放送に先立って、東大阪市の司馬遼太郎の自宅敷地に、2001年11月1日、司馬遼太郎記念館が開館した（写真1）。

NHKの『坂の上の雲』の公式ウェブサイトには、「ロケ地マップ」のバ



写真1 司馬遼太郎記念館



写真2 日新館 水練水馬池

ナーが開設され、どの場面をどの場所で撮影したかを詳細に示している³⁾。松山のお囲い池という設定で撮影場所となった日新館のウェブサイトでは、「旧松山藩時代からある水練場で、真之が陸軍の兵士と向き合う場面を撮影したと紹介されている（写真2）」³⁾。また、愛知県犬山市に位置する博物館明治村では、2010年11月13日から2011年2月27日まで、『坂の上の雲』のロケが行われたことにちなんで、『坂の上の雲』のまち松山フェア・秋山真之と正岡子規展』および『スペシャルドラマ明治村ロケ展』が開催された。

『坂の上の雲』がドラマ化される以前から、旅順は日露戦争の戦跡が多く残る場所として観光名所となっていた。1905年にはすでに戦地巡りとして新聞記者らが旅順を訪問していた。また、大阪商船の門司-大連便、日本郵船の長崎-大連便が就航すると多くの日本人が大陸観光へ出かけた。最大の激戦地となった旅順の二〇三高地に乃木希典が揮毫した記念碑が立ち、観光ルートが整備されると、旅順は「聖地」となっていた。

日本人の国民的聖地となった旅順は、戦後、ソ連の10年間の占領期を経て、大連市と合併して旅大市となり、かつての旅順地域は旅順口区となった。そして、旅順口は中国有数の軍港となり外国人の立入が禁止された。1981年に大連と分離すると日本占領期に作られた施設の修復が始まった。1988年7月には、白玉神社納骨祠跡地に旅順海軍兵器館が開館し、1996年には水師管会見所が復元されるとともに、旅順北部が対外開放された。2009年、軍港を除く地域が全面的に開放され、観光化が進んでいる。ドラマ『坂の上の雲』の放送以降、旅順でもこのドラマを意識した観光開発が進められている。

本稿では、日露戦争の記憶とドラマ『坂の上の雲』はどのような関係があるのかを考察する。

2. フィルム・ツーリズム

映画やドラマの撮影場所を巡る観光は、ロケ地観光やフィルム・ツーリス

ムと呼ばれている。ロケ地観光という言葉を日本に定着させたのは、2003年にNHKで放送された『冬のソナタ』である。様々な放送局で再放送されるとともにDVDが販売されると、多くの旅行会社は「冬ソナツアー」などの名称で、ドラマに登場した場所を巡るツアーを企画した。並木道の撮影場所となった南怡島を訪れる日本人観光客の様子は海外のメディアでも取り上げられるほど特異な社会現象と見られた⁹⁾。こうした映画やドラマの撮影場所は、メディアではロケ地巡りやロケ地観光と呼ばれ、観光研究においてはフィルム・ツーリズム (film/movie tourism、film/movie induce-tourism) と呼ばれる。

フィルム・ツーリズムでは、映画のストーリーを追体験するとともに、映画の裏舞台を経験することに重点が置かれている⁵⁾。フィルム・ツーリズムが顕著な現象として確認されるようになったのは1980年代で、1985年公開の『愛と哀しみの果て』(Out of Africa) とアフリカ観光、1986年公開の『クロコダイル・ダンディ』(Crocodile Dundee) とオーストラリア観光などが例として挙げられる。特に映画の公開と観光に密接な関係が見られたのは、1995年公開の『ブレイブハート』(Braveheart) であり、映画公開後、スコットランドを訪れる観光客は3倍に増加した⁶⁾。

フィルム・ツーリズムは、個人仕様 (personalization) の観光であり、聖地巡礼に例えられる⁷⁾。映画やドラマの撮影場所となったことで聖地と呼ばれるようになったのは、『ロード・オブ・ザ・リング』(The Lord of the Rings) でエドラスの丘として用いられたニュージーランドのマウント・サンディ (Mt. Sunday)、『冬のソナタ』の南怡島、1995年にBBCで放送されたドラマ『高慢と偏見』(Pride and Prejudice) でペンバリー (Pemberley) として使用されたライム・パーク (Lyme Park) など、枚挙に暇がない。これらの場所を訪ねた人々は、自身で撮った写真をブログに載せ、「聖地巡礼」の記録を公開している。

このような現代のフィルム・ツーリズムと巡礼の類似性についてビートン (Beeton) は、観光客がファンタジーや名声と関連づけることで訪れる場所

を聖地と見なす点において、フィルム・ツーリズムは巡礼と類似しており、観光客は仲間内の視点で作りに上げた評判とともに、断片的な場所や俳優、登場人物の記憶を収集し、家に持ち帰ると指摘している⁸⁾。さらに、このような撮影場所への巡礼はジューン・オースティン (Jane Austen) の読者から見れば、真正な体験とはいえないかもしれないが、ドラマや映画で『高慢と偏見』を知った多くの視聴者にとって、ライム・パークをペンバリーと見なすのは全く真正で魅力的なものであり、現実とフィクションを同時に体験することはポストモダンの時代における楽しみ方の一つであるという⁹⁾。

こうした指摘のようにフィルム・ツーリズムは、極めて現代的な現象に見える。しかし、振り返ってみると、詩や小説に登場した場所を後世あるいは同時代の人間が訪れ、思いに耽るという行為は、洋の東西を問わず古くから行われたものである。西行の歌枕を訪れた松尾芭蕉は、その感想を『奥の細道』につづっており、イタリアに旅立ったゲーテは古代ローマの建造物に思いをはせている。



写真3 松尾芭蕉像 (平泉)

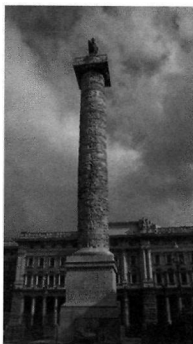


写真4 コロンナ広場

現代の観光客は、『奥の細道』や『イタリア紀行』を一種のガイドブックと見なし、これらの記述に基づく物見遊山を行っている（写真3）。例えば、ローマのコロンナ広場にあるマルクス・アウレリウス記念柱はゲーテの滞在中に発掘され、現在の広場に設置されたという解説を至るところで目にする（写真4）。

過去の偉人の追体験は小説や紀行文に限られない。川中島や関が原、桶狭間などの古戦場もまた、歴史の追体験の場となってきた。

桶狭間の戦いは1560年5月19日、織田信長が今川義元軍を破った戦国時代の著名な合戦の一つである。現在、桶狭間の古戦場と見なされている場所は二箇所ある。第一は、名古屋市緑区の桶狭間古戦場公園で、1912年に今川義元戦死之地の碑が建てられ、2000年には桶狭間古戦場保存委員会によって織田信長と今川義元の像が建立された（写真5）。第二は、豊明市の桶狭間古戦場伝説地であり、1771年に人見弥右衛門と赤林孫七郎によって建てられた七石表や1816年建立の桶狭間古戦場古碑がある。

これらの記念碑の建立のきっかけになったのは、古戦場の訪問であった。古戦場に立って古を弔い、懐かしむ風習が広まるにつれて、記念碑が建立され、それらの記念碑を含む古戦場の絵が『東海道名所図会』や『尾張名所図会』に描かれるようになっていった¹⁰⁾。著名な古戦場や歌枕の地には記念碑



写真5 桶狭間古戦場公園



写真6 秋山好古像

が立てられ、現在では観光名所となっている。『坂の上の雲』のドラマ化が決定した後、秋山兄弟誕生地整備募金委員会は秋山兄弟の生家を復元し、好古の騎馬像と真之の胸像を設置することを決めた（写真6）。また、山口県周南市では児玉源太郎像の複製を設置し、観光資源にしようと計画している¹¹⁾。

撮影場所となったという事実を利用して、新しい観光資源を発掘しようとする動きは日本各地で見られる。観光客の側面から見れば、映画やドラマに対する個人的な思い入れがフィルム・ツーリズムの動機となっているが、地方自治体から見れば、観光開発や町おこしのための宣伝効果を持つのである。『坂の上の雲』に限らず、大河ドラマの撮影場所となった地域では、一時的な場合であるにせよ、観光客が殺到し、それを見込んだイベントが行われる。このような大河ドラマの撮影と町おこしのつながりは、1987年放送の『独眼竜正宗』に始まる。ドラマの高視聴率とともに仙台の観光を促進したのは、1982年、大宮-盛岡間の東北新幹線の開通であった。『独眼竜正宗』の舞台となった仙台やその翌年に放送された『武田信玄』の山梨には1000億円を越える観光収入がもたらされ、大河ドラマの撮影地となることは地域のイメージアップだけではなく、確実な経済効果があることが証明された。この現象は21世紀に入ってからも続き、2008年に公開された映画『おくりびと』は、山形県酒田市に多くの観光客を呼び寄せ、映画のポスターと同じ構図で写真撮影をする人が後を絶たなかった（写真8）。『坂の上の雲』と松山観光もこの現象の一つと捉えられるが、これが従来大河ドラマと大きく異なる点は、撮影場所がロシアやアメリカなど海外にまで及び、これに伴い観光客も日露戦争の舞台となった旅順へ赴くようになったことである。

3. 日露戦争と聖地旅順

旅順は、遼東半島に南端に位置する交通の要所である（地図1、写真9）。19世紀、満州進出を目指すロシアはアーサー港として旅順を建設し、ダー



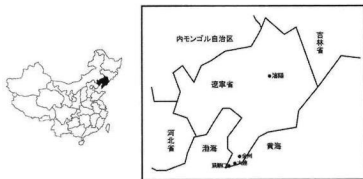
写真 8 山形県酒田市



写真 9 旅順口区新市街

ルリーという名前で大連の都市計画に着手した。1894年に勃発した日清戦争の講和条約が1895年4月17日に締結され、日本は旅順を含む遼東半島を獲得した。まもなく、三国干渉を受け日本が遼東半島を中国へ返還すると、ロシアは東清鉄道敷設権を獲得し、遼東半島に勢力を拡大し続けた。日本とロシアは1904年に国交を断絶し、同年2月8日、日露戦争が勃発した。

日露戦争に際しては、志賀重昂らの文人が観戦に訪れたことが知られている¹²⁾。戦後は、東西の朝日新聞社が大陸修学旅行を企画し、学生たちが満韓巡遊船ろせった丸に乗って大陸へ渡った。学生たちは、日清・日露の戦跡を見学し、陸軍軍人から現地講話を聞いたほか、日本人会開催の歓迎会に参加した¹³⁾。



地図 1 遼寧省地図

夏目漱石は、大学予備門時代の旧友である満鉄総裁の中村是公に誘われて、1909年9月2日、東京を出発し、大陸へ向かった。漱石は、大連・旅順・奉天・撫順・長春・ハルビンなどを見学し、平壤とソウルへて帰京した。漱石の大陸旅行は、東京と大阪の『朝日新聞』に紀行文「満韓とところどころ」として掲載された。旧友に誘われて旅立った先には、成立学舎以来の友人である橋本左五郎や佐藤友熊らがいた。誰とどこであった、何を食べたなど、記述内容が漱石の個人的な出来事に集中し、無邪気に自由に見えるのはそのためであると指摘されている¹⁴。大陸旅行のメインともいえる二〇三高地に案内されたときも、「道標に似た御影の角柱が立っていた」ことと、「不幸にして、二百三高地の上までは来たようなものの、どっちが東でどっちが西か、方角がまるで分らない」と述べている¹⁵。旅順港を見下ろしたときには、「あの上を舟で漕ぎ廻って見たいと云う気は少しも起らなかった」¹⁶と記し、戦利品記念陳列館を訪れた際も、展示品については「残念な事に大抵忘れて仕舞つた」¹⁷と述べている。

漱石が大陸を訪れたときは、戦跡記念碑の類はほとんど建立されておらず、戦跡に関する語りも完成されていたわけではなかった。竣工間近だった表忠塔（白山山塔）については、「旅順に着いた時汽車の窓から首を出したら、つい鼻の先の山の上に、圓柱のような高い塔が見えた。それが餘りに高過ぎるので、肩から先を前のほうに突き出して、窮屈に仰向かなくては頂點迄見上げる譯に行かなかつた」¹⁸と述べている。二〇三高地の爾靈山の碑の竣工は1913年、水師営会見所の碑の竣工は1916年であった。すなわち、1930年代に「聖地」と謳われた旅順の風景は、漱石の大陸訪問中には存在していなかったのである。漱石の前に広がっていた旅順は、「ことごとく坊主」¹⁹の山々で囲まれた町であり、堡壘が築かれた山々に険しい斜面に巨大な石がごろごろとところがある殺伐とした戦場であつただろうと想像される。漱石は、旅順のヤマトホテルを見たときには、「まるで廢墟」²⁰だという感想を述べている。

旅順には、1913年の爾靈山の碑の竣工を皮切りに、次々と記念碑が建立

された(写真10)。二〇三高地の碑は、1911年、旅順戦跡保存会が建碑願を提出したことに端を発する。碑は30年式銃実包型として、乃木希典による題字「爾靈山」²¹⁾を使用すること、弾丸部は中空でアルミニウム製、薬莖部は青銅、基塔は鑄鍛した戦利品、基礎は八角形の3段重ねにすることが提起された²²⁾。戦利品を鑄潰して砲弾型の忠魂碑を作る方法は、明治期にしばしば用いられていた方法である。この時期、設計者たちは伝統的な碑碣の形から脱して新しい記念碑の形を模索しており、塔の形はその一つであった。1896年竣工の第一軍戦死者記念碑は、大熊氏廣が設計した金属製の砲弾型の塔で、周囲には戦死者の名前が刻まれた²³⁾。

現在、白玉山塔と呼ばれる高さ66メートルの表忠塔は、1909年11月28日、旅順忠魂碑として建設された(写真11)。この碑の建設発起人の一人である乃木希典は、「唯千古忠烈の靈魂を慰め、且は其の遺烈を千載に伝えんが為に、私等の発起で夫の白玉山に一基の忠魂碑を建立せんとしたのが、仰もの始まりであるが、幸ひにも多数者の賛成を得まして那のやうな大きなものが

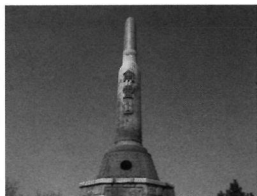


写真10 二〇三高地 爾靈山の碑

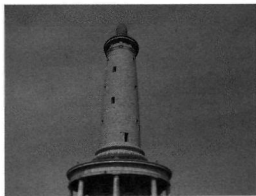


写真11 白玉山塔

経つたことになつたので、本懐の至りに思つて居りますやうな次第、定めし幾多殉難者の英魂も喜んで之を享けらるゝことだらうと信じます。」²⁴⁾と述べている。「壯嚴雄大ニシテ陸上海面ヨリ遠謀シ得ルカ如キ一大歴史的忠魂碑」となるように旅順忠魂碑建設委員長の陸軍中將、伊地知幸介が記し

た²⁵⁾。次第に白玉山塔は、旅順のシンボルとなっていた(図2、地図2)。

1914年には満洲戦跡保存会が発足し、戦争記念碑ブームは過熱していっ



旅順戦跡



地図2 旅順口

図2 旅順戦跡パンフレット

た。戦跡保存の目的は、国内においては「永遠二忠烈ヲ表彰」することであり、国外においては「世界ノ史乘ニ貢献」することであるとされた。業務内容は以下のように示された。①戦跡記念標の建設(旅順、金州、得利子、遼陽、沙河、奉天、緑黄江、休戦条約締結の地点)、②表面に題字と事歴を刻んだ簡素な形式の石碑を建設すること、③会見所等の保存、④旅順戦跡の監視家屋の建設、⑤旅順戦跡への道路の建設、⑥旅順戦跡の維持工事、⑦各戦争模型等の製作、⑧海事方面の事歴の表彰、⑨戦跡記念館の建設、⑩白玉神社殿宇の建設、⑪戦闘地図および戦跡案内記の発行であった²⁶⁾。1916年に水師営会見所の碑、1918年に乃木保典戦死の碑と東鶏冠山北堡壘の碑が建

立された（写真12、写真13）。その様子は、「目下戦跡保存会の手により巨額の費用を投じてその保存に努め道路を修築せしを以て、何れの戦跡へも馬車を通す」²⁰と旅行雑誌『ツーリスト』に紹介された。

かつて戦場となり荒れ果てたに記念碑や博物館が建設されると、これらの



写真12 乃木保典戦死の碑



写真13 東鶏冠山北堡壘の碑

場所をつなぐルートが確立した。旅順の戦跡を巡るツアーは、一種の巡礼路が登場するのである。1930年代から始まったバス・ツアーは1940年代に入ると戦跡の語りも行程も十分に練られていった。例えば、1939年、財団法人忠霊顕彰会が制作した『満洲戦績巡禮』は満州の戦跡を紹介したガイドブックのようなものであり、各地の記念碑や戦跡の絵とともに攻略戦の説明が記載されている。二龍山堡壘には、「旅順の包圍攻略線はさすがに難攻不落と言はれた。けあつて、我が軍の最も苦心したところで幾多忠勇の同胞を失ひ、日露戦争史を飾る盡忠義烈の一大絵巻である。…特に乃木將軍や旅順口閉塞の決死隊の行動は後世武人の亀鑑として国民敬慕の的となつてゐる」²⁰と書かれている。この本には、大連や旅順、奉天（瀋陽）など満州各地の忠霊塔の建立年、地域、祭神、祭日が記されているほか、満州の記念碑一覧が掲載されている。満州戦跡ガイドブックが作られると、その中から主要な記念碑や博物館が選ばれ、一日程度で日露戦争の戦跡巡りができるパッケージ・ツアーが完成していった（表1）。

表1 旅順観光行程（『ポケット満洲国要覧』1941年より作成）

二日行程	第一日 閉塞記念碑—白玉山表忠塔—博物館—大正公園—大案子山—二〇三高地—港 第二日 戦利記念品陳列館—東鶏冠山北堡壘—望台—盤龍山—二龍山—松樹山—水師營—露國墓地
一日行程	白玉山表忠塔—戦利記念品陳列館—東鶏冠山北堡壘—水師營—博物館—二〇三高地
半日行程	白玉山表忠塔—東鶏冠山北堡壘—戦利記念品陳列館

漱石が「大抵忘れて仕舞つた」と書いた戦利記念品陳列館は、この本には以下のように説明されている。「建物は元露軍下士集会所であったのを其儘利用したもので、わが砲弾の跡を存し小さい乍らもよく充実した参考館である。現在各所の戦跡は爆破を受けた其の儘ではあるが、爾来歳を閲すること三十余歳、然も戦跡に植林されてからは、その倂を異にするものもあるから、戦跡巡覽に向かう人は茲に立寄って充分なる当時の予備知識を得られんことを勧める。」²⁹⁾

戦跡の保存を通して、1930年代には旅順は聖地としての風格を帯びるようになった。「日露の戦役後、早くも30年に近き歳月は流れた。満洲の地たる処、皇軍苦戦のときを追懐せしむる戦蹟多く、今なお遊子の胸を傷ましむ。旅順・金州・遼陽等々いづれか我が忠勇なる将士の血戦の跡たらざる。この意味に於いても満洲の地ことはまさしく我等の生命線と云ふべきである。」³⁰⁾

もっとも、東鶏冠山北堡壘や二龍山堡壘の碑のように旅順の碑はシンプルな形で建設され、また日露戦争で活躍した人物の銅像が建てられることもなかった³¹⁾。それは、「紀念標ハ何レモ石標ト為シ表面ニ題字及事歴ノ大要ヲ鏤刻スルノ外特ニ加工セサル簡素ノ形式ヲ有スルモノ」³²⁾とすることが定められていたためである。これに対して、大連や台湾では人物像として記念碑が建立されていた。例えば、大連の大広場（現在の中山広場）には1914年、高さ8メートルの大島義昌像が建立された³³⁾。台北には、1902年に圓山公園に水野遵像³⁴⁾と、1906年に児玉源太郎像が新公園（現在の二二八和平公園）

に建設された。1911年から13年には、新公園に後藤新平像、隋園公園に祝辰巳像³⁵⁾、十六圓公園に大島久満次像が相次いで建設された。

大連や台湾の銅像建設に先立って、東京では銅像建設ラッシュが起こっていた。1907年4月8日の『東京朝日新聞』の「銅像づくし」という記事で、製作中の銅像および竣工した銅像が紹介された。当時、銀行家の松田源五郎の像などの民間人の像も建てられたが、中心となったのは軍人と政治家の像であった。1907年、陸奥宗光像が竣工し、1909年には3海将（西郷従道・川村純義・仁礼景範）などが竣工した³⁶⁾。海軍3提督像は公募され、東京美術学校在学中の朝倉文夫による仁礼景範像が一等に当選した。西郷従道像と川村純義像は本山白雲が制作した。3提督像は1944年に撤去されたが、昭和初期には海軍省を象徴する重要な記念碑であったことが以下のように『偉人の倅』に記されている。「海軍省内に一と度び足を踏み入れる者は、我が海軍に於ける最高位の功勞者、海軍中將子爵仁禮景の生けるが如き銅像を仰ぐであらう。」³⁷⁾

廣瀬武夫と杉野孫七の像は、こうした銅像ラッシュの中で、1910年、東京市神田区須田町の国鉄万世橋前に建設された（図3）。銅像の建設は、廣瀬の死後、財部彪大本営参謀を設立委員長として計画が進められ、制作者には渡邊長男があたった。渡邊は銅像設置場所として当初、日比谷公園を想定し、公園の池を湾に見立てて旅順港閉塞を再現しようとしたが、日比谷公園



図3 廣瀬武夫・杉野孫七像（絵葉書）

から許可が下なかったため、それまで銅像が建立されていなかった万世橋に銅像を建設した。銅像設置に際して、15万人の寄付者が25000円の工費を担い、東郷平八郎が揮毫した³⁸⁾。「明治三十七、八年の日露大戦に際し旅順閉そくの決死の大任を果たし遂に湾内の一片の肉と散つた軍神廣瀬中佐の命日は来る廿七日であるが、これが記念のため海洋少年団ではこの日午後八時半から海洋少年団長海軍大佐原道太氏指揮の団員数十名が塵あいに汚れた軍神の銅像を洗淨する事となつた」³⁹⁾

『偉人の倂』においても、廣瀬武夫像は特別に優れた銅像と見なされている。「軍神廣瀬中佐が爾く一般的に喧傳せられた所以のものは、素より軍功の顯著なるもの有つたことは勿論だが、第一は死所を得たからに外ならない。日露戦争と廣瀬中佐、この二者は永久に不即不離の間に我が日本人の士氣を鼓舞し、日本軍人の儀表権保持者と称せらるゝに相違いない。」⁴⁰⁾

1930年、台座1.5メートルの台座に乗る高さ4メートルの山県有朋の騎馬像が陸軍大臣官邸に建てられた。この像は、後に長崎の平和記念像を制作することになる北村西望が担当した⁴¹⁾。北村西望は1932年には、肉弾三勇士像を制作し、1938年、兄玉源太郎の騎馬像を制作した。5メートルを越えるこの騎馬像は「日本一の大銅像」といわれ⁴²⁾、戦前の日本における銅像建立ブームの頂点を示した。

このブームは、1943年に始まる金属供出により終わりを告げた。1943年には徳川家康や太田道灌など96体が回収され、1944年には、井上勝や寺内正毅、松田正久⁴³⁾らの銅像が撤去された。皇室や皇族に関する銅像、寺院等における国宝に指定されている仏像、審査員会で存置が決められたものは撤去から免れた。また、楠正成や伊藤博文、西郷隆盛、大村益次郎、和氣清麻呂、廣瀬武夫、大山巖、東郷平八郎らの像は、国民崇敬の対象となっているために撤去されなかった⁴⁴⁾。北白川能久親王や有栖川宮熾仁親王、有栖川宮威仁、大山巖のように撤去から免れた像は、戦後、移築され、現在では木陰にひっそりと立っている⁴⁵⁾。

4. 社会主義的景観から観光地へ

1945年を境に旅順の風景は一変した。1945年8月9日、ソ連軍が中国北東部に進軍し、8月22日、旅大市に駐留した。1950年2月14日、中ソ友好同盟相互援助条約が締結された。1955年5月31日のソ連軍撤退後も軍港旅順は、外国人の立入は原則的に禁止されていた。例外的に外国人の立入が許可されていたのは、帰還者たちが中心となって日中の友好を掲げた参観団などのツアーのみであった⁴⁶⁾。

1954年9月、フルシチョフが訪中した際、日露戦争の戦跡を訪問するとともに、瀋陽のソ連軍烈士陵園を訪問した(写真14)。同年10月12日、中ソ共同声明が出され、ソ連軍の旅順撤退が決定すると、フルシチョフは記念碑の建設を提案し、3つの記念碑が建立された。第一は、大連のスターリン広場(現在の人民広場)のソ連烈士記念塔⁴⁷⁾、第二は、旅順のスターリン路の勝利記念塔(写真15)、第三は、旅順博物館前の中ソ友誼塔(写真16)である。

中ソ友誼塔は、当時の中ソの密接な関係を反映している。中国式の台座の上に設置されたロシア式の塔の周りには「中ソ人民大団結群像」というレリーフが施された(写真17)。台座の正面にはクレムリンと天安門が彫られ、両側面にはソ連の専門家たちが中国の工業と農業を援助する様子が描か



写真14 瀋陽 ソ連烈士陵園



写真15 勝利記念塔

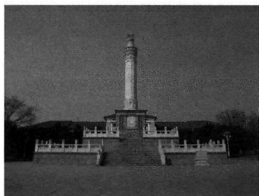


写真16 中ソ友誼塔



写真17 中ソ友誼塔 北面

れ、背面には旅順市の風景が用いられた。1957年2月14日に行われた除幕式において、中ソ友好協会総会副会長の李徳全は以下のように述べた「我々はこの崇高で壮麗な中ソ友誼塔の前で次のように帝国主義分子に告ぐ。彼らの陰謀は永遠に思いのままにはならない。我々は中ソの友誼と両国人民の団結、社会主義陣営各国の団結を自己のもののように保護する。我々はますます堅強に中ソの友誼を堅持し、社会主義陣営各国の団結をさらに強めてゆく。」⁴⁸⁾

ロシア人墓地として建設された後、ソ連烈士陵園は大きく3回にわたって修復工事が行われてきた(地図3)。陵園の修復の過程は旅順が辿ってき



地図3 ソ連烈士陵園



写真18 露兵之墓

た歴史と重なっている。ロシアは旅順を占拠した際、1897年、小案子山の麓に墓地（沙俄公墓）の建設を開始した。日露戦争後、1908年、日本はこの墓地を完成させ、14873人のロシア兵を埋葬した（写真18）。墓地には露国忠魂碑と旅順陣歿露兵之碑が建立された（写真19）。「祖国とロシア皇帝、旅順口を守るために犠牲になったロシアの兵士のために」と刻まれた露国忠魂碑（現在の日露戦争記念碑）は当時の墓地の中心であった。1955年に紅軍烈士記念塔が建設されると墓地の中心地はこの塔に移った（写真20）。この塔は、ソ連の専門家によって設計され各地から集められた数十名の中国の職人が二ヶ月かけて陵園の完成させたものであり、正面の銅版には、「ソ連と中国の人民の自由と幸福のために犠牲になった烈士たちは永遠に不滅であ



写真19 旅順陣歿露兵之碑



写真20 紅軍烈士記念塔



写真21 ソ連兵の像



写真22 ソ連烈士記念塔

る」と中国語とロシア語で刻まれている。塔の先端には、オリーブの枝が絡んだ金の星が掲げられている。塔の前には、銃と旗を掲げた陸海軍のソ連兵が膝をついて祈りを捧げる一対銅像が置かれている（写真21）。塔の後ろには、1945年から55年に死去したソ連兵と家族および朝鮮戦争で死んだソ連軍パイロットの墓が建設された。1999年には、大連の人民広場（旧、スターリン広場）からソ連烈士記念塔が移設された（写真22）。

紅軍烈士記念塔の説明には「ロシア建築の高い水準を示す逸品」であり、「中ソ両国人民の鮮血を凝集した友誼の象徴である」とあるように、勝利記念塔と同様に1950年代の中ソの友好関係を物語っている。また、露国忠魂碑として建設された日露戦争記念碑は、1940年代の日本では「実に敵にもあつき武士道の精華を世界に示した我等の誇」⁴⁹であると紹介され、現在では看板に「ロシアが中国に侵略した証である」と記されている。烈士陵園は長い間、手入れされることがなかった。草木がいたるところに生い茂り、薄暗いだけではなく、墓にはめ込まれていた顔のレリーフはほとんど削り取られていた。2009年5月、訪中に際してメドベージェフ大統領がソ連烈士陵園を訪問する可能性が出てきたことから、烈士陵園はロシアの基金によって修復されることになった（写真23、写真24）。2009年からは入場料も無料

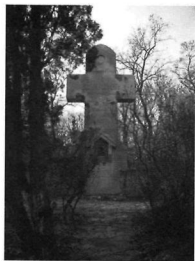


写真23 日露戦争記念碑



写真24 日露戦争記念碑

になった⁵⁰。そして、2010年9月26日、メドベージェフ大統領がソ連烈士陵園を訪れ、紅軍烈士記念塔の前に花を捧げた⁵¹。

現在の旅順には、二〇三高地や水師管會見所、ソ連烈士陵園、旅順日俄監獄⁵²のように、中国とソ連（ロシア）、日本が関わる施設が多数ある。万忠墓はその一つである（写真25）。1894年に勃発した日清戦争中、11月21日から24日にかけて、日本兵が旅順で民間人を含む多くの人々を虐殺する事件を起こした。1895年春、旅順の人々は白玉山の北に犠牲者を埋葬し、「万忠墓」の碑を建てた。碑文には、「光緒甲午十年日本敗盟旅順不守官兵民男婦被難者一万八千余口忠骸火骨灰叢於此 太侖顧元助光緒廿二年十月谷旦」⁵³と刻まれた。日露戦争後、この碑に刻まれた「日本敗盟」の字を見て不快に思った日本軍がこの碑を旅順の日本赤十字病に持ち込んだ。1922年、旅順華商公会議が資金を出して修復したときには、「四明公所」⁵⁴と碑に彫られた（写真26）。現在は、享殿、「永矢不忘」（永遠に忘れない）と書かれた扁額、3基の石碑（写真27）と陳列館があり、愛国主義教育基地に指定されている。

1980年代に入ると、海軍博兵器館や軍港公園が建設されていった。旅順の観光化が進み、新聞にも名所旧跡案内が掲載されるようになった。万忠墓については以下のように書かれている。「これは1894年の中日甲午戦争に際して我国の殉難同胞を合同埋葬した墓地である。当年、日本侵略軍は旅順に



写真 26 旅順万忠墓記念館



写真 27 万忠墓碑

侵攻し、3昼夜にわたって武器を持たない市民たちを虐殺した。苑鉄匠と王長江を英雄人民の代表として不屈の精神を命がけて誓い、次々と日本侵略者に反撃した。しかし、腐敗した無能な清朝政府は全く無関心であり、2万以上の同胞が日本帝国主義者の刀によって惨殺された。」⁵⁹

1994年、旅順虐殺から100周年を迎え、万忠墓で「甲午戦争百年祭祀」が開催された。この年、万忠墓は旅順万忠墓記念館と名前を変え、当時の国務院総理だった李鵬が揮毫した。100周年に際して、本格的な発掘調査が行われ、発掘された人骨や金属類は資料館に展示されることになった。同年、中国共産党中央宣伝部は「愛国主義教育実施要綱」を制定し、1997年には100箇所の愛国主義教育基地が定められ、万忠墓もその中に含まれた。愛国主義教育基地の指定は2001年と2005年にも行われ、2005年には旅順日俄監獄旧址博物館も愛国主義教育基地となった。二〇三高地や水師営会見所は愛国主義教育基地には含まれないが、二〇三高地には「勿忘国恥」と書かれた看板が立っている。

アロー戦争の際に英仏連合軍に破壊された北京の円明園や瀋陽の九一八歴史博物館（満州事変跡地）にも見られる「国恥」という言葉は、近代中国において破壊された建物を眺め、犠牲者を弔うことで、愛国心を奮い立たせる役割を果たす。カラハン（Callahan）は、こうした恥の部分に強調する歴史観を悲観（pessimism）と楽観（optimism）を併せたペソプティズム（pessoptimism）であると説明した⁶⁰。

2004年から本格的に中国で実施されている革命観光（紅色旅游）は、こうした愛国主義教育基地を巡り、場合によっては「国恥」を通して近代史を学ぶ観光である。具体的には、「中国共産党の指導者たちが革命戦争期に樹立した偉大なる功績を留める記念地や指標物を通して、また、革命の歴史や革命の事跡、革命の精神を内容として、組織し受け容れた旅行者に、追想と学習を促し、参観遊覧させるテーマ性のある活動」⁶¹と説明される。「2004 - 2010年全国紅色旅游發展規則綱要」が公布され、全国12地域の革命観光ゾーンが制定された。旅順を含む「東北紅色旅游区」では、ハルビンの東北

烈士記念館や瀋陽の九一八歴史博物館などが中心的施設であり、旅順では、万忠墓やソ連烈士陵園、八一烈士陵園、金伯陽記念館が革命観光スポットとなっている⁵⁸。

1996年には旅順口北部、2010年には軍事地域を除く旅順口の全地域が開放され、対外国人が訪れるようになるが、これはちょうど中国で愛国主義教育と革命観光が広がっていく時期と重なっていた。1996年に復元された水師営会見所、二〇三高地や東鶏冠山北堡壘などに再び日本人が訪れると、記念碑はそのまま残っていても、その風景はかつての「聖地」と同じではなかった。記念碑を取り囲む中国の政治的および社会的環境は戦前と全く異なり、日本人が満州と呼んでいた場所へのまなざしは、日中戦争の苦い敗戦を経て、大きく変わった。観光地には、しばしば、愛国主義教育基地を表すプレートや「勿忘国恥」という看板がある。二〇三高地の爾靈山の碑には「これは日本帝国主義が外国を侵略した犯罪の証拠と恥辱柱となっている」と日本語で書かれ、東鶏冠山北堡壘のコントラチェンコ戦死の碑には、「戦後、日本軍はその寛大な度合いと顕著な戦績を誇示するため」に碑を建てたことが日本語で書かれている。

2010年には旧日本人街や旧旅順監獄、旅順博物館、旧ヤマトホテル、肅親王府にも行くことができるようになった。ただし、旧ヤマトホテルは現在、招待所（安い旅館）として使用されており、漱石が泊まったころの華やかさはない。外観しか見ることができない肅親王府の建物はひどく傷んでいる。緑の屋根と黄色の壁が特長的な旅順駅はかつてのように復元されているが、駅としては使用されておらず、戦跡土産食堂や戦跡案内などの看板が立ち並ぶかつての駅前のにぎやかさを想像することは難しい（図4、写真28）。

ただし、古い建物の歴史的価値の見直しは中国全体で進んでおり、旅順口も例外ではない。例えば、旅順博物館や老式汽車博物館（クラシックカー博物館）が挙げられる。

老式汽車博物館の建物は、1903年に帝政ロシアが旅順実業学校として建設したもので、1905年には日本軍によって将校集会所に改築された。この



図4 旅順駅前『旅順の戦蹟』



写真28 旅順駅

建物は、戦利品陳列館や軍事博物館として用いられた後、食堂や宝玉石店、服飾店など雑多な用途で使用され、内装も外装も修復されることがなく、ひどく損傷していた。2007年、大連の芸術家である劉向陽氏による投資で、この建物はクラシックカーの博物館として本来の状態に修復された。同博物館の尹革館長は以下のように語り、建物の保存の重要性を指摘している。「古い建物の機能と本来の概観が復元されることは文物の保護の原則であり、一種の文化である。現在、太陽溝街区の古い建物は集中しているが、破損がひどいが我々は我々の努力を信じている。必ず建物は復元される。旅順に埋もれている近代史の多くの文化は、我々に恵まれた優れた資源であり、我々はみなこれを保存してゆく義務がある。」保護すべき建物の中に旧ヤマトホテルや肅親王府も含まれている⁵⁹⁾。

こうした古い建物の保存と観光利用だけではなく、ドラマ『坂の上の雲』を意識した観光化も進んでいる。『坂の上の雲』は「坂上の雲」あるいは「坂上雲」と訳され、日本の文壇の巨匠、司馬遼太郎の長編歴史小説であり、タイトルの由来が開国したばかりの日本が西洋国家の先進文化に憧れ抱くと同時に掻き立てられるように学ぶ姿が「一心不乱に坂に向かって上る雲」のようであると説明されている⁶⁰⁾。二〇三高地には、「坂上雲」という文字が見られるようになり、かつて「二〇三工芸商店」という名前であった土産物



写真 29 二〇三高地



写真 30 二〇三高地

屋は「坂上雲」となった（写真 29、写真 30）。土産物屋では爾靈山の碑がプリントされたTシャツや爾靈山の碑のレプリカ、古い写真を用いた絵葉書や写真集などが売られている。

現代中国における日露戦争の解釈は一つではない。政治的に見れば、日露戦争は当時のロシアと日本が中国国土の一部で繰り広げた戦争であり、この「国恥」を忘れないことが愛国主義教育の一つである。他方、経済的に見れば、日露戦争の戦跡は重要な観光資源である。日本人観光客は、二〇三高地などの旅順の戦跡にかつての栄光や聖地の痕跡を求め、旅順の町並みにノスタルジックな雰囲気を感じるのである。

5. おわりに

戦後、日本国内で日露戦争の記憶は急速に消されていった。1947年、GHQの指令によって東京都の忠魂碑銅像等撤去審査委員会は、都内20基の記念碑と銅像のうち11基の撤去を決定した。同年7月21日、神田万世橋の駅前広場の広瀬武夫と杉野孫七の像が撤去された⁶¹⁾。1951年、日本海海戦で戦った三笠が記念艦として修復され横須賀に保存されることが決まった際にも、軍国主義的ではないことが強調された⁶²⁾。

日露戦争から1世紀が過ぎて、日露戦争に関する多数の書籍が出版され

るなど、状況は変わってきた。2005年5月27日、日本海海戦100周年を記念して記念艦三笠のリニューアル式典が横須賀で開催された。そして、2009年末、ドラマ『坂の上の雲』が放送され、近代日本の姿が鮮やかに描かれた。司馬遼太郎はこの小説がフィクションであることを主張していたが、ドラマの視聴者にとってはどの部分が史実であり、どの部分がフィクションであるかを見極めることは容易ではない。フィルム・ツーリズムといても、映画『ロード・オブ・ザ・リング』やドラマ『高慢と偏見』、『冬のソナタ』など完全なフィクションと、『ブレイブハート』や『坂の上の雲』、『プライベートライアン』のように実在の人物や実話に基づく戦争映画では、観光客を受け容れる地域の人々の心情は単純ではない。物語の設定が現代に近づくほど、観光客と観光地の人々の認識のギャップが大きくなることもある。

マウント・サンディをエドラスと見なし、映画『ロード・オブ・ザ・リング』の雰囲気浸ることと、二〇三高地を訪れて日露戦争の勝利に浸ることは同じではない。戦争映画のフィルム・ツーリズムの場合、観光へ出かける動機は個人的なものであったとしても、戦争映画が作られた背景にはしばしばナショナリズムが横たわっており、戦争の勝利という物語の追体験は個人的であると同時に集団的あるいは国家的でもある。国威発揚の旅順巡拝が行われていた1930年代には、本格的な戦争映画はほとんど製作されていなかったが、従軍記者たちが書いた記事や廣瀬武夫や東郷平八郎などの「軍神」の語りが現代の戦争映画と同じような役目を果たしていた。自国で繰り返し聞いた戦争の語りに基づいて、戦場を巡りながら、従軍の苦しさや勝利の喜びを疑似体験するのは巡礼と同じであった。

聖地の記憶は様々な物語を通して形成される。現代の日本人観光客は、教科書で学ぶ日露戦争、ドラマ『坂の上の雲』の個人的解釈と中国における商業的な利用、日露戦争を「国恥」と見なす中国的解釈など、様々なフィルターを通して日露戦争の記憶を体験しているのである。

註

- 1) かつて旅順と呼ばれていた地域は、現在、遼寧省大連市旅順口区に相当するが、本稿では旅順と記す。また、中国の記念館は「紀念館」と記されるが、本稿では「記念」という表記を使用する。
- 2) NHK『坂の上の雲』<http://www9.nhk.or.jp/sakanoue/specials/locamap/>
- 3) 会津藩校日新館ウェブサイト <http://www.nisshinkan.jp/category/news/page/5>
- 4) Sohn Jie-Ae, "S. Korean star sparks tourist boom." March 16, 2005, CNN http://articles.cnn.com/2005-03-13/travel/skorea.travel_1_korean-air-yon-sama-narita-airport?_s=PM:TRAVEL, Han Hee-Joo and Lee Jae-Sub "A Study on the KSB TV Drama Winter Sonata and its Impact on Korea's Hallyu Tourism Development." *Journal of Travel & Tourism Marketing*, Vol. 24(2-3), 2008, p.120
- 5) 中谷哲哉「フィルム・ツーリズムにおける“観光地イメージ”の構築と観光体験」遠藤英樹・堀野正人（編著）『観光社会学へのアクチュアリティ』晃洋書房、2010年。
- 6) Simon Hudson and J.R. Brent Ritchie "Promoting Destinations via Film Tourism: an Empirical Identification of Supporting Marketing Initiatives." *Journal of Tourism Research*, Vol.44, May 2006, p.389
- 7) Niki Macionis and Beverley Sparks, "Film-Induced Tourism: an Incidental Experience." *Tourism Review International*, Vol.13, 2009, p.100
- 8) Sue Beeton *Film-Induced Tourism*. Channel View Publications, 2005, p.35
- 9) Linda V. Troost, "Film Tourism, Portraying Pemberley." *Eighteenth-Century Fiction* Vol.18, Iss.4, 2006, pp.20-21. 本論文でトルーストは、1979年版と比べて1995年度版では、ベンバリーへ出かけたエリザベスが現代の旅行者のように描かれていることが、ベンバリーの撮影場所となったライム・パークへの観光客を増加させた一因であると述べている。
- 10) 羽賀祥二『史蹟論—19世紀日本の地域社会と歴史意識』名古屋大学出版会、1998年、24 - 50ページ。
- 11) 「児玉源太郎銅像、複製設置へ」『朝日新聞』（2010年6月23日）
- 12) 高媛「戦地から観光地へ」『中国21』29号、2008年。
- 13) 有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘文堂、2002年。
- 14) 小宮豊隆「解説」夏目漱石『漱石全集第8巻小品集』岩波書店、1966年、530ページ。
- 15) 夏目漱石「満韓ところどころ」夏目、前掲書、214ページ。
- 16) 同書、215ページ。
- 17) 同書、205ページ。
- 18) 同書、203ページ。

- 19) 同書、202 ページ。
- 20) 同上。漱石は、ホテルの内装はすばらしく「外と内は全く反対」だと書いている。
- 21) 1904年12月5日、乃木が指揮する第三軍が二〇三高地を占領した。同月11日の乃木の日記に「乃木三絶」の一編である以下の「爾靈山」の詩が書かれている。「爾靈山險豈難攀 男子功名期克艱 鉄血覆山山形改 万人斉仰爾靈山」(訳、二〇三高地が険しいからといって、登るのが難しいことがあるだろうか。男子としての功名のためには困難に打ち勝つことを決心している。武器と兵士の血が山腹を覆い、山の形が変わってしまった。すべての人は爾靈山を仰ぎ見る。) 渡辺三男「將軍乃木希典の文藻」『駒澤國文』34号、1997年、39-40 ページ。
- 22) 「旅順二〇三高地に建碑の件」1911年12月21日、アジア歴史資料センター、防衛省防衛研究所、Ref. C02031469900
- 23) 木下直之「記念碑と建築家」鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人(編)『シリーズ 都市・建築・歴史8 近代化の波及』東京大学出版会、2006年、295-298 ページ。
- 24) 「乃木大将の感想」『東京朝日新聞』(1909年11月28日)
- 25) 「旅順表忠塔関係書類ノ件」1915年4月2日~4月12日、アジア歴史資料センター、防衛省防衛研究所、Ref. C08020687300
- 26) 「満洲戦跡保存会に関する件」アジア歴史資料センター、1914年7月29日、防衛省防衛研究所 Ref. C08020381500
- 27) 「旅順」『ツーリスト』1916年7月、27 ページ。
- 28) 財団法人忠霊顕彰会『満洲戦績巡禮』、1939年、非売品。
- 29) 『ポケット満洲国要覧』1941年、84 ページ。
- 30) 「日露の戦跡をたづねて」『新満洲国写真大観』大日本雄辯会講談社、1932年、116-117 ページ。
- 31) 『近現代戦争に関する記念碑—「非文字資料の基礎的研究」報告書』国立歴史民俗学博物館、2003年、938-939 ページ。
- 32) 「満洲戦跡保存会に関する件」アジア歴史資料センター、1914年7月29日、防衛省防衛研究所 Ref. C08020381500
- 33) 制作者は新海竹太郎、建設者は満鉄の建設委員会の国澤新兵衛であった。
- 34) 水野遵(1851-1900)。1895年に台湾総督府の民政局長に就任した。
- 35) 祝辰巳(1868-1908)。台湾総督府の財務局長や殖産局長などを経て、1906年、民政局長に就任するが、2年後に病死する。
- 36) 「銅像づくし」『東京朝日新聞』(1907年4月8日)。外務省の陸奥宗光像は戦時供出で撤去されたが、1966年に再建された。「三海将銅像除幕式」『東京朝日新聞』(1909年5月28日)。この頃の銅像建設に関する記事は、「銅像の大流行：不調和な建設地」(1913年6月11日の『東京朝日新聞』(1913年6月11日))、「銅像記念碑の流行」『東京朝日新聞』(1913年6月13日)などがある。

- 37) 『偉人の倂』（資料編）、95 ページ。『偉人の倂』は 1928 年に刊行された近代日本の銅像写真集である。約 600 の銅像の写真、建設年、設計者、像主の身分や職業などが記されている。2009 年にゆまに書房より復刻版が出版された。
- 38) 山室建徳『軍神—近代日本が生んだ「英雄」たちの軌跡』中公新書、2007 年、66 - 69 ページ。
- 39) 「二十七日の命日に廣瀬中佐の銅像洗ひ」『東京朝日新聞』（1926 年 3 月 35 日）
- 40) 『偉人の倂』（資料編）111 - 112 ページ。
- 41) 戦後、GHQ による銅像撤去の対象となったが、芸術作品であるとして上野の東京都美術館に保存されることになった。その後、井の頭公園内の北村西望のアトリエへと移設され、1992 年、萩市に移され、現在に至る。
- 42) 『東京朝日新聞』（1938 年 1 月 19 日）
- 43) 井上勝（1843 - 1910）。ロンドン大学で造幣や鉄道の技術を学ぶ。帰国後、道頭専任となり、新橋—横浜の鉄道開通に尽くす。1909 年、帝国鉄道協会会長に就任する。寺内正毅（1852 - 1919）。教育総監や陸軍大臣を経て、初代朝鮮総督に就任する。1916 年、元帥となる。松田正久（1845 - 1914）。フランスに留学し、軍事を学ぶ。大蔵大臣や司法大臣を歴任する。立憲政友会の設立に関わる。
- 44) 「戦列へ続く銅像—東郷元帥や廣瀬中佐などは居残る」『東京朝日新聞』（1944 年 5 月 14 日）
- 45) 大坪潤子「騎馬像の居場所」『非文字資料の可能性—若手研究者研究成果論文集』神奈川大学、2008 年、270 ページ。
- 46) 高媛「“大東亜旅行圏”から“郷愁を誘う”旅へ—日本人の“満州”観光」『旅の文化研究所研究報告』7、1998 年、57 - 68 ページ。
- 47) 1955 年 5 月 8 日に除幕式が行われた。「飲送駐旅順口区蘇連軍回国」『人民日報』（1955 年 5 月 29 日）この記念塔は、1999 年に旅順のソ連軍烈士陵园に移築された。
- 48) 「旅順中蘇友誼塔挙式隆重落成典礼」『遼寧日報』（1957 年 2 月 15 日）
- 49) 『ポケット満洲国要覧 康德 8 年版』1941 年
- 50) 「旅順万忠墓紀念館蘇軍烈士陵园 18 日免費開放」『大連日報』（2009 年 5 月 15 日）
<http://dl.people.com.cn/GB/channell01/235/238/200905/15/93556.html>（人民網）
- 51) 「梅徳韋杰夫拜謁蘇軍烈士陵园」中俄交流網（2010 年 9 月 27 日）
http://www.zejil.com/new_xx.asp?id=33508
- 52) 旅順日俄監獄は 1902 年に帝政ロシアが建設を開始した監獄である。日露戦争後、日本が監獄を完成させ、1907 年、関東都督府監獄処と名前を変え、1920 年には関東庁監獄となり、1926 年には関東庁刑務所となった。1934 年の関東刑務所を経て、1939 年に旅順刑務所となった。安重根は 1909 年 11 月 3 日から 1910 年 3 月 15 日まで関東都督監獄処に拘禁された。郭富純（編）『旅順日

俄監獄実録』吉林人民出版社、2003年。

- 53) 金其楨『中国碑文化』重慶出版社、2002年、1245ページ。顧元助は直隸知州候補であった。
- 54) 四明公所は中国のギルドである。この文字はまもなくセメントで塗りつぶされた。
- 55) 「今日漫遊古戰場—不到旅順口、枉來大連遊」『遼寧日報』（1984年7月29日）
- 56) William A. Callahan, 2010, *China: the Pessimist Nation*. Oxford University Press.
- 57) 全国紅色旅游工作協調小組弁公室（編）『紅色旅游導游員講解員知識競賽題集』中国旅游出版社、2007年、1ページ。
- 58) 「我市啓動“紅色旅游”盤活旅游資源」（2007年2月9日）大連新聞網
http://www.daliandaily.com.cn/gb/daliandaily/2005-03/04/content_661300.htm
- 59) 車承川「旅順太陽溝歴史街区的現状與保護」（2010年12月31日）大連日報
http://news.daliandaily.com.cn/special/content/2010-12/31/content_42667.htm
- 60) 王易「坡上的雲：日本的近代歴史」（2010年12月26日）鳳凰網文化
http://culture.ifeng.com/gundong/detail_2010_12/26/3700875_0.shtml
- 61) 「追放第一陣」『朝日新聞』（1947年7月23日）、倒された廣瀬像の写真が掲載された。
- 62) 「軍艦“三笠”を復元—軍国調ではない！と計画者」『朝日新聞』（1952年11月21日）

Memories of a Sacred Place: A Case Study of Lüshun, China

Yoko Takayama

The NHK drama *Clouds above the Hill* evokes the glorious memories of the Russo-Japanese War (1904 – 1905). The play is based on a novel by the famous Japanese historical novelist, Shiba Ryotaro (1923 – 1996), which describes the Meiji Period (1868 – 1912) through the First Sino-Japanese War and the Russo-Japanese War. The popularity of this drama has driven its audiences to seek out the locations it references, namely, Matsuyama in Ehime Prefecture and Lüshun in China.

The Japanese people had considered Lüshun as a national sacred place after the Russo-Japanese War and enthusiastically visited it in 1930s because the battle that occurred at this location led to Japan's victory. After the end of the Second Sino-Japanese War in 1945, the landscape of Lüshun came to be influenced by Soviet-style Socialism as Soviet troops had occupied the city for ten years. Lüshun became one of the most important the naval ports in China and did not permit foreigners to enter.

In 2010, the Chinese Government opened Lüshun completely, with exception of the military area, although the city had already been partly opened in 1996. Finally, Japanese tourists have been able to visit Lüshun and numerous travel agencies in Japan have organized tours to Lüshun. However, since now there is the bitter association of military defeat and nostalgia for the old landscape in Lüshun, the tone of the tours since 1996 has been quite different from that of the tours in the 1930s. Moreover, the Patriotic Education Campaign that began in the 1990s gave Lüshun another meaning, that is, a place of 'National Humiliation'. These words represent the imperialists' invasion and the partition of China. For example, 203 Highland is the location where the fiercest battle, for control of the fortress, occurred between the Japanese Army led by General Nogi and the Russian Army headed by General Stoessel. Nogi succeeded in occupying the fortress and concluded a peace treaty with Stoessel. Therefore, for Japan, this place was considered the most important battlefields in the Russo-Japanese War at the time. In contrast, China erected a placard that read 'Don't Forget, National Humiliation' on this site.

Lüshun was built as a result of interactions between China, Russia and Japan. In the late 19th century, Russia built the basement of Lüshun as a port town; in the early 20th century, Japan inherited the construction; after the end of the Second Sino-Japanese War, the Soviets changed the landscape in the form of Socialist

Realism; China brought the city to completion, despite the interruption of the Cultural Revolution; finally the city is now considered as an important tourist resource, which has the potential to attract both Russian and Japanese tourists. Today, Japanese tourists arbitrarily select certain glorious memories from the contemporary Lüshun and construct an image of a sacred place depending on the many types of narratives formed through history classes at school or personal interpretations of the theatrical drama.